小学生の放課後における時間の使い方
— 習い事に関する報告 —

関　朋昭*・川上　光博**・菅沼　淳子***

How Elementary Pupils Use Their Time After School
— Report on Their Extra Lessons —

Tomoaki SEKI,Mitsuhiro KAWAKAMI,Junko SUGANUMA

Abstract

This paper reports how elementary pupils spend their free time after school for the extra lessons. They resulted in attending a preparatory school for a junior high, followed by English Conversation Lessons, practicing piano and Shodo, Japanese Calligraphy Writing. On the other hand, one of the reasons why they do not join their extra attendance they answered was doing sports, which dominated 21.7 percent as a whole. The researcher will enhance reliability of this data more, and realize children's lifestyles and their present situations, continuing this survey.

1　目的

現在、子供たちの生活時間は、以前のそれと大きく変わりつつある。シチズンの行った「子供（小学生）の時間感覚における意識調査」[1]によれば、大切な時間として位置づけられているのは「睡眠」・「食事」・「家族と一緒にいる」時間である。しかし、小学6年生の11.8%が平日24時以降に就寝し、親と一緒に朝食を摂る割合も約46%と、実際には意識とはまた別の生活時間にならざるを得ないのが現状である[2]。また子供の体力は全体的に低下をたどり、基礎的運動能力の推移も低い水準にある[3]。

一方、小学生における放課後の時間の使い方も同時に変わりつつある。学習塾・習い事または稽古事（以下総じて習い事と称す）に費やされる時間は、平均して週に3時間40分であり、20年前の約2時間05分を大幅に上回る調査結果[1]と比較しても、現在の小学生が通う習い事の内容も多様化・複雑化しているのではないかという予測が立つ。学校という画一的な機関から切り離された、いわゆる金を媒体とした経営体へ投資するという方法を用いた時間の使い方ということも理由のひとつである。

また、時間という資源を使う子供たちを消費者と捉えた場合、習い事を供給する経営体との間には、一つの市場が形成される。近年習い事に使われる時間は拡大していることから、そこにどのような需要と供給の関係があるのかを検討することを思い至った。

本研究は、関[4]が行った「スポーツ振興のための基礎的調査—苫小牧の小学生を対象として—」を先行研究とし、小学生の放課後における生活時間の中でも特に習い事が、どのような傾向をもった市場を形成しているかを調査分析し、一事例として報告するものである。

＊　助教授　理系総合学科
＊＊　技官（技術専門職員・総合学科）
＊＊＊　非常勤講師 苫小牧工業高等専門学校

2　方法

（1）調査期日は平成17年7月8日から同年8月24日までとした。
（2）調査対象は、苫小牧市内の小学校22校に通う6学年の全児童とした。
（3）調査方法は、小学校校長会の協力を得て、対象校にアンケート用紙を郵送にて配布・回収。
（4）調査内容は、性別・習い事への参加と不参加・参加内容・参加動機・参加頻度・任意による不参加への理由の6項目である。
（5）回収は、1699名（平成17年7月1日現在）中、1620名から得られた。（回収率95.4%）

3　結果と考察

3.1 標本の属性と習い事への参加率について

苫小牧市内の全小学校の6学年児童、男子児童は848名、女子児童は772名である。習い事への参加実数及び男女の割合を、表1に示す。調査した全児童の48.0%にあたる778名が、一つ以上の何らかの習い事に参加していることが判明した。これを性別で見ると、男子児童で35.5%、女子児童で61.8%が、何らかの習い事に参加しているという結果になる。これら男女の割合については、検定によって差異が見られた。($p<0.001$) 文部科学省の全国的な調査によれば、小学校6年生の習い事への参加率（学習塾通いを除く）は、男子児童で59.3%である。[4] アンケート調査から得られた男子児童における習い事への参加率は、女子児童及び全国と比較しても極端に低い。これには、スポーツ少年団活動への参加率が男子児童において57.0%に達しているのに対し、女子児童は27.5%であるという、先行研究の結果の裏づけとも言える[4]。従って、これらの参加率における差異は、男子児童・女子児童ともに、放課後の時間の使い方について異なるニーズを持っていることを示していると考えられる。

表1　習い事への参加状況

		加入	未加入	合計	
度数	男	301	547	848	
	女	477	295	772	
合計	合計	778	842	1620	
		加入	未加入	合計	
%	男	35.50	64.50	100	***
	女	61.79	38.21	100	
合計	合計	48.02	51.98	100	

（注1）上段は実数、下段は割合
（注2）*** $p<0.001$

3.2 習い事に参加している児童に関する統計

習い事に参加している児童を対象とした調査について、その主な種類及び男女間での比較結果を図1に示した。最も多くの児童が参加しているものは、「学習塾」であり、次いで「英語会話」「ピアノ」「習字」と続いている。また、男女別にその実数を比較したものを表2に示した。3.1の結果からも予測できるように、女子児童における習い事への参加実数は、男子児童の参加実数を殆どにおいて上回っている。特に「英語会話」「習字」「ピアノ」における検定から得られた差異は大きい。その中で男子児童の実数が女子児童を上回ったものは「学習塾」であり、学校での教科活動の補助的手段として習い事に通うという放課後の時間を使う傾向が見られる。

一方、女子児童において最も実数の高いものは「ピアノ」であり、これは率にして女子児童全体の25%を占めるものであった。4人に1人がピアノの稽古に通っているという割合である。また、「バレエ」「エレクトーン」など参加の種類も多岐にわたっている。

表2　習い事における種類と男女別実数

学習塾

	参加	不参加	合計	
男	166	676	842	**
女	117	654	771	
n.a.	2	5	7	
合計	285	1335	1620	

習字

	参加	不参加	合計	
男	69	773	842	***
女	164	607	771	
n.a.	2	5	7	
合計	235	1385	1620	

英語会話

	参加	不参加	合計	
男	87	755	842	***
女	132	639	771	
n.a.	1	6	7	
合計	220	1400	1620	

そろばん

	参加	不参加	合計	
男	17	825	842	
女	23	748	771	
n.a.	0	7	7	
合計	40	1580	1620	

ピアノ

	参加	不参加	合計	
男	22	820	842	***
女	193	578	771	
n.a.	0	7	7	
合計	215	1405	1620	

バレエ

	参加	不参加	合計	
男	1	841	842	**
女	9	762	771	
n.a.	0	7	7	
合計	10	1610	1620	

エレクト

	参加	不参加	合計	
男	7	835	842	**
女	20	751	771	
n.a.	0	7	7	
合計	27	1593	1620	

（注1）*** $p<0.001$
** $p<0.05$
統計的に男女差がみられた

（注2）n.a.は無回答

次に一人で複数の習い事に参加している児童の割合を図2に示した。二つの習い事を掛け持ちしている割合は全児童の14.7%、三つ以上に参加している児童は全体の3%であった。これらには、スポーツ少年団活動に参加しながらの児童も含まれており、放課後の時間が様々な活動に使われていることが見て取れる。特に「英語会話」「ピアノ」に参加している児童は、それら一つだけに参加するよりも、複数に参加している割合が高い。(表3)「学習塾・英語会話」「英語会話・ピアノ」「ピアノ・習字」などの組み合わせで、複数の習い事への参加がうかがえる。

3.3 参加動機と自発性について

習い事に参加していると回答した児童を対象に、その参加動機を尋ねたものが図3である。自発性に着目すると、「自分からすすんで」という割合は全体の32.5%にとどまった。「その他」「無回答」を除く59.3%の児童は、友人・親・兄弟など身近な人間の勧めなどによって参加を決定している。

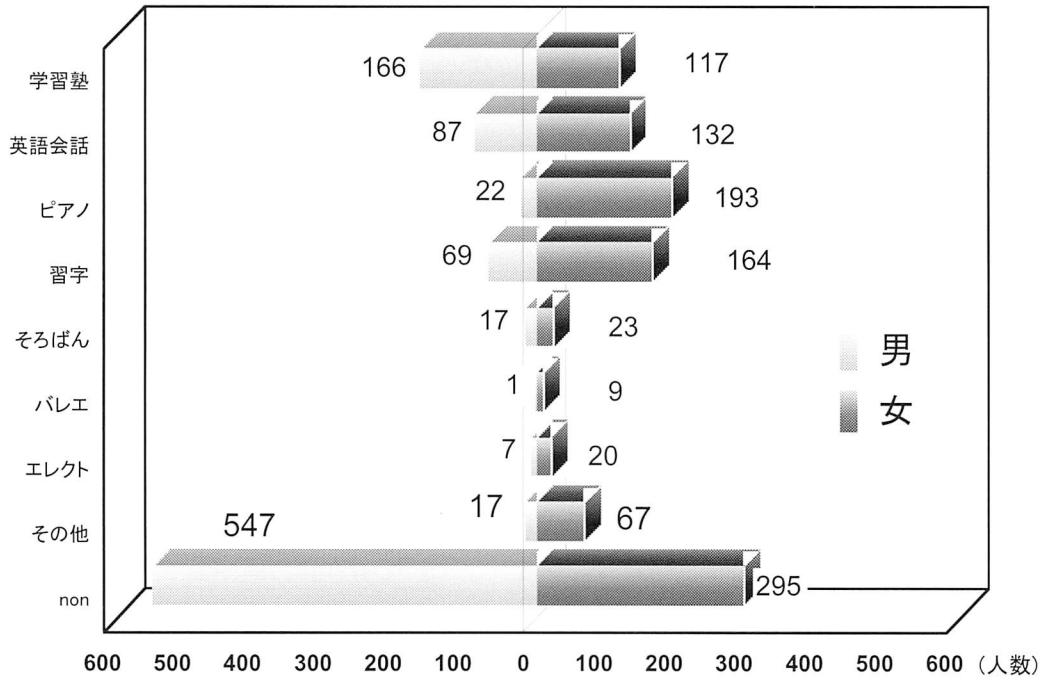

図1　習い事の種類別および性別の比較

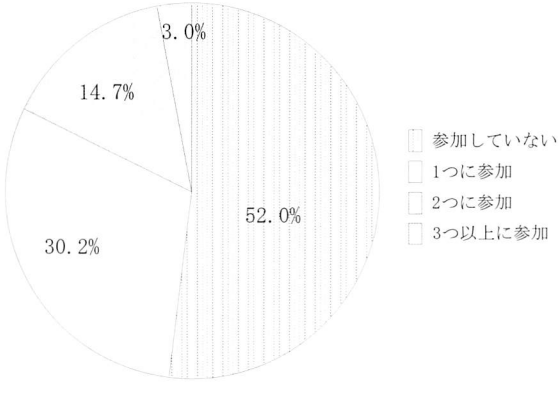

図2　複数習い事をしている内訳

表3　二つの習い事を選択している内訳

2つ

	学習	英語	ピアノ	習字	そろばん	バレエ	エレクトーン	その他	合計
学習		47	24	22	1	0	6	7	107
英語			32	22	2	0	1	8	65
ピアノ				34	4	2	0	9	49
習字					4	0	2	7	13
そろばん						1	0	1	2
バレエ							0	1	1
エレクトーン								1	1
その他									238

2つ

	学習	英語	ピアノ	習字	そろばん	バレエ	エレクトーン	その他	合計
学習		19.75	10.08	9.24	0.42	0.00	2.52	2.94	44.96
英語			13.45	9.24	0.84	0.00	0.42	3.36	27.31
ピアノ				14.29	1.68	0.84	0.00	3.78	20.59
習字					1.68	0.00	0.84	2.94	5.46
そろばん						0.42	0.00	0.42	0.84
バレエ							0.00	0.42	0.42
エレクトーン								0.42	0.42
その他									100

（注）上段は実数、下段は割合

男子児童における「親にすすめられた」と答えた割合は 48.2%と高く、先に述べた学習塾への参加率の高さと統合した場合、「親にすすめられて学習塾に通っている」という一連の動きが予測できるが、逆に「ピアノ」など芸術分野への習い事にも広く興味を示している女子児童においては、自発的に参加を決めている割合が最も高かった。

3.4 参加頻度について

習い事に参加していると回答した児童を対象に、その参加頻度について尋ねた。表4はその実数と割合であり、図4はそれをグラフで示したものである。この数値は、主に力を入れて参加している習い事一つについて尋ねた結果であるが、男子児童・女子児童共に週1〜2回の参加が大半を占めている。

しかし習い事に参加している児童の 31.3%が複数参加者、いわゆる「かけもち」をしている現状を踏まえれば、これらの数値は更に上がるものと推測する。またそこにスポーツ少年団活動などが加わった場合、小学生の放課後の生活時間は、その日その日によって様々な活動に使われることが考えられる。後述するが、スポーツ少年団活動の参加頻度は週3日以上が最も多く、全体の 74.7%を占める[4]。このように多くの時間を割く活動と習い事とを両立させていく場合、過剰な負担とならない参加頻度を設定することは、将来にわたって多くの活動に参加していく意欲を維持させていくためにも重要であると思われる。

3.5 不参加と抵抗条件について

習い事に参加していない（不参加）と回答した52%（842 名）について、その理由（抵抗条件）を任意で尋ねたところ、表5の結果が得られた。また、その割合を示したものが図5である。

不参加の理由として最も高い割合を示したものは「スポーツをしているから」であり、全体の 21.7%がスポーツ少年団活動またはその他のスポーツ活動に参加していることを抵抗条件として挙げた。次いで「やりたくない」「好きではない」など、習い事への興味・関心の薄さがうかがえる抵抗条件を挙げている。

「スポーツをしているから」という抵抗条件については、先行研究[1]により、スポーツ少年団活動へ

表4　習い事の練習頻度

	週3日	週1〜2日	月に数回	合計
男	28	251	16	296
女	41	415	18	476
合計	69	670	35	777

	週3日	週1〜2日	月に数回	合計
男	8.61	87.18	3.78	100
女	9.46	84.80	5.41	100
合計	8.88	86.23	4.50	100

（注）上段は実数、下段は割合

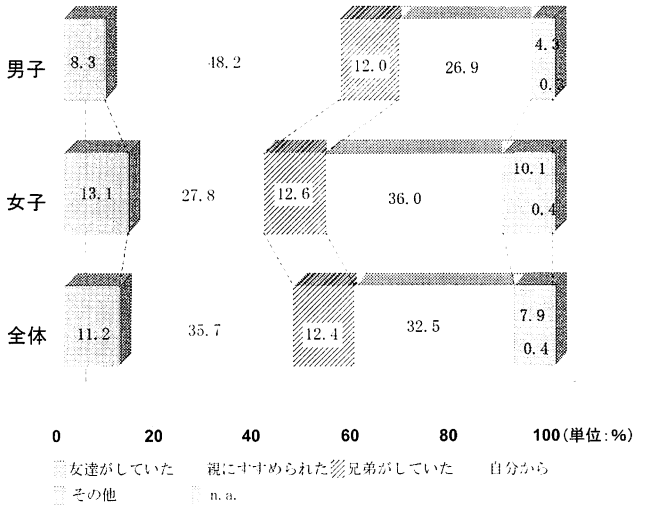

図3 習い事への参加動機について

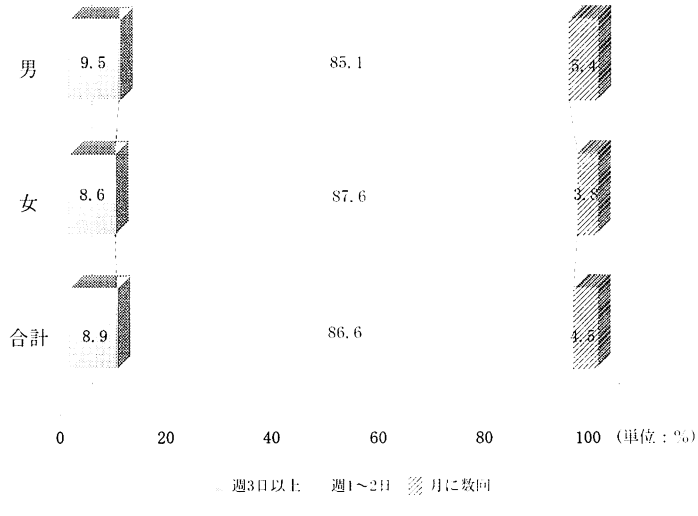

図4 習い事への参加頻度

の参加率が全児童の42.9%であること、またその中でも男子児童における参加率が57%と、女子児童の27.5%を大幅に上回っていること、また参加頻度についても週三日以上参加している児童が全体の74.7%を占めることなど、抵抗条件として十分になりうる要素を持っている。また逆に、スポーツ少年団活動への抵抗条件として、17.7%の児童が「習い事をしているから」と回答しており、習い事、スポーツ少年団活動それぞれが、不参加の抵抗条件として影響しあっている一面がうかがえる。これらの結果から、習い事への抵抗条件に対する解決策のひとつとしては、スポーツ少年団活動と両立できることを目的とする時間的余裕を生み出すことが必要と考える。

放課後の時間を資源と捉えたとき、それをよりよく消費するために習い事を選択するのは、活動する児童だけが決定するわけではない。様々なニーズに対応できる参加形態の工夫によって、「親が反対しているから」「お金がかかるから」などの抵抗条件においても減少の可能性はあると思われる。

4　まとめ

本研究では、苫小牧市内の小学6年生における習い事への参加率とその内訳から、小学生の放課後の時間がどのように使われているかを、視点を限定して調査・分析した。

これら放課後の時間を資源と捉え、それを消費する児童を消費者と見なした場合、習い事はその消費者のニーズを満たす手段の一つになりうる。そこには市場が形成され、消費者や彼らの周囲の人間、環境の原価に適合した商品（習い事）を提供するという、いわゆるマーケティングが必要になる[6]。本研究において、そのマーケティングについて確かな施策や改善策を見出すには、データの信頼性という面でも多少画一的ではあった。しかし、(1)男子児童における、スポーツ少年団活動との関わり、(2)興味・関心を持ってもらうための工夫、(3)時間的・経済的理由による抵抗に対応することの必要性、など、これからの市場をよりよくするための事柄を見出す手がかりは得られたと思われる。

今後は継続した調査を行うことによって、データの信頼性を更に高め、子どもの生活時間の調査と実態の把握に努めたい。

表5　習い事への抵抗条件

	男	女	合計
やりたくない	119	39	158
自分の時間がない	35	24	59
やりたい習い事がない	10	10	20
お金がかかる	25	26	51
スポーツをしているから	144	39	183
習い事がすきじゃない	95	35	130
親が反対している	12	25	37
通信教育をしているから	10	10	20
何となく	39	31	70
その他	58	57	115
合計	547	296	843

	男	女	合計
やりたくない	21.76	13.18	18.74
自分の時間がない	6.40	8.11	7.00
やりたい習い事がない	1.83	3.38	2.37
お金がかかる	4.57	8.78	6.05
スポーツをしているから	26.33	13.18	21.71
習い事がすきじゃない	17.37	11.82	15.42
親が反対している	2.19	8.45	4.39
通信教育をしているから	1.83	3.38	2.37
何となく	7.13	10.47	8.30
その他	10.60	19.26	13.64
合計	100	100	100

（注）上段は実数、下段は割合

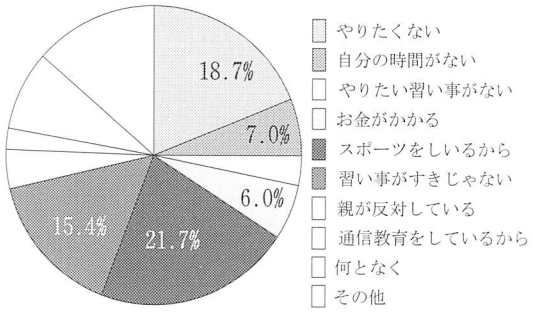

図5　習い事への抵抗条件

引用・参考文献

1)　シチズン意識調査；20年の推移で見る子供（小学生）の時間感覚、シチズン株式会社、2001
2)　文部科学省；義務教育に関する意識調査報告書、文部科学省委嘱調査報告書、2005
3)　文部科学省；平成16年度体力・運動能力調査報告書、2005

4)関　朋昭；スポーツ振興のための基礎的調査―苫小牧市の小学生を対象として―、北海道体育学会研究大会発表要旨、2005
5)　文部科学省；完全学校週五日制の下での地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査報告書、文部科学省生涯学習政策局、2003
6)　相原　修；マーケティング入門＜第3版＞、日本経済新聞社、2003

(平成17年12月14日受理)